SF

1969・8 NO.4

特集：スペース・オペラ

〈土星シリーズ〉①

土星のプリンセス ---- 司修一

未来学講座 ---- 中川健

付録：合宿 読書会の手引き

スペース・オペラ・ノート

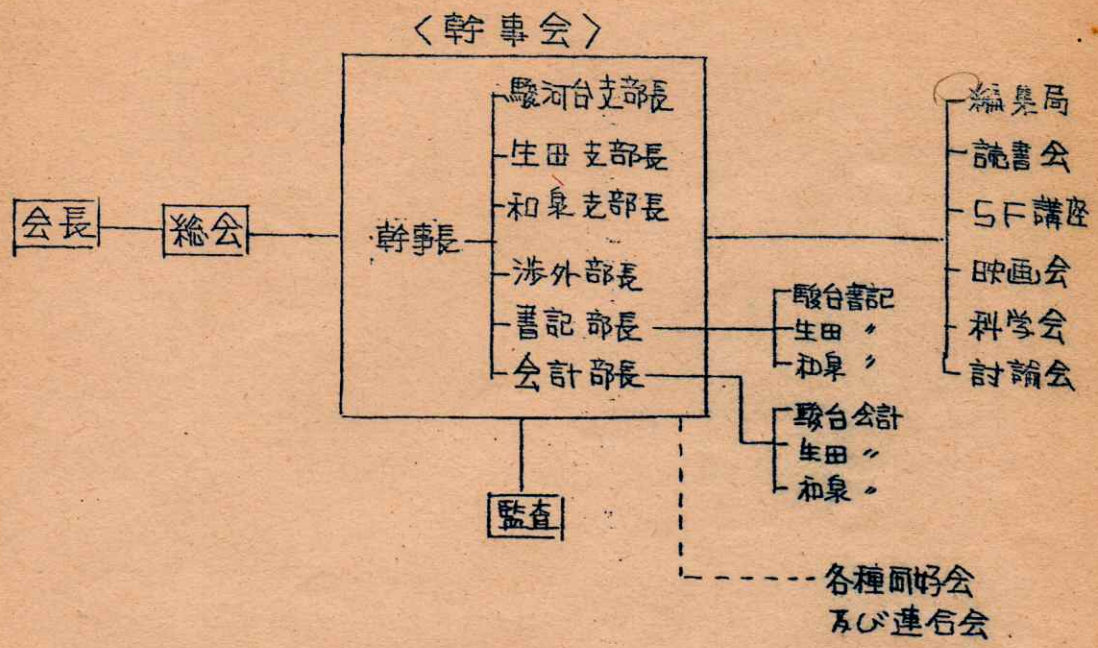
J・G・バラード その人と作品 ノート

おまけ

読書会専用ノート

明治大学SF研究会

明治大学SF研究会 組織図



○役員及び委員名簿

会長：大西尹明（商学部教授）

幹事長：北島利幸（法3）

駿河台支部長：清川礼子（文3）

生田支部長：藤本佳延（農3）

和泉支部長：横山正紀（商2）

会計部長：翠川英夫（工3）

渉外部長：北島利幸（法3）

書記部長：清川礼子（文3）

編集局長：松本博（工3）

会計：丸山正子（駿台）翠川英夫（生田）
坂井百合子（和泉）

書記：各支部長兼任

編集局員：松本博　北島利幸
井沢誠一郎　坂井紀子
向後益男　沼間一美

読書会：庄司修一郎　坂井百合子

SF講座：小島義一郎　池西英幸
丸山正子

映画会：飯田一夫　長田和子

討論会：野上映一　竹浪隆平

科学会：谷口清　出原祥二郎

監査：川瀬広保（文4）

〈あなたのSF論を書いて下さい〉

未来学講座

中川 健

ホワイト氏は、ベッドに横になるといつものようにラジオのスイッチを入れた。すると聞き慣れた音楽がホワイト氏の耳に飛び込んできた。それは某ビール会社のコマーシャルソングだった。ホワイト氏はその唄を聞いて、あ、「未来学講座」の始まる時間だなと思った。それは、MSFC放送が、毎週月曜日から金曜日までの毎日夜10時50分から11時まで放送する番組であった。「未来学講座」といっても1980年の政治・経済・社会がどうのこうのという堅い番組ではなく、今、流行のSF作家の月古十氏と大杉右門氏が、排泄の未来学とか、囚人の未来学とか、思慮分別、とりとめのないことをしゃべるのである。いつぞやなどは、猫の未来学などというのをやったことがあった。未来においては、猫や犬などの愛玩動物はすべて滅望すると彼らは言う。何故なら、小鳥の可愛らしさと、犬の従順さと、猫の陰険さと、トカゲのグロテスクさを兼ね備えるペットアンドロイドが出現するからである。このペットは決して主人に背くことはなく、また食物も必要としない。しかしながら彼らは、未来においても猫だけはその存在価値を認められると言う。それは、猫の肺を人間の肺のかわりに移植をすると、人間の寿命が8年のびるということが医学的に証明されるからだそうだ。猫の肺を移植した人々は皆一様に言う。「我が肺は猫である」。どうもどこかで聞いたことがあるようだ。そんな馬鹿くしい番組を聞いていったい何のたしになるのだと軽べつする人もいるかもしれない。だけどホワイト氏はこの番組のファンなのである。世の中とはとかくそういうものなのである。ホワイト氏にもどういうものかわからない。

月古十氏と大杉右門氏の発する不協和音をホワイト氏はベットの中でニヤニヤしながら聞いている。今日の講義は処女及び童貞の未来学だ。今日も相変わらずたいしたこともなく一日が終わる。おまけに今日は土曜日、明日の日曜日には可愛いあの娘とウッシッシなどと考えていたホワイト氏は、ふと何か妙なことに気がついた。はっきりこうとは言えないのだが、何かが妙なのだ。そのうちに番組も終り、ホワイト氏はラジオを消すとなおも考え続けた。しかし考えれば考えるほど何が妙なのかはっきりしなくなった。そして、トイレに行こうとベッドを抜け出した時、ホワイト氏はその原因に気づいた。人は誰も、トイレに行こうとすると良いアイデアや問題解決が得られるもの

らしい。ホワイト氏はトイレに行くかわりに、今日の新聞をとってきた。そしてラジオ番組表で10時50分のところを見た。MSFC放送のその時間は「今日のニュース」となっていた。やっぱりそうだ。今日は土曜日なのだ。「未来学講座」は月曜から土曜までなのだから今日放送しているわけがないのだ。するとさっき聞いたのは何だったのだろうか。幻聴か、それとも夢でもみていたのだろうか。いやそんなことはない。あれが幻聴や夢であったとしたら、地球が太陽の回りをまわっていて、明治大学FSF研究会があるということを否定しなければならないことになる。しかしこの考えはどう考えても非論理的である。ホワイト氏はトイレに行くのを忘れて考え続けた。あらためてラジオのスイッチを入れて、番組表とてらし合わせてみたが異常はなかった。考えあぐねたホワイト氏はいつしか快よい眠りについていた。ホワイト氏はいつもこうなのです。

次の日、不思議な気持をぬぐいきれないままホワイト氏は10時50分にラジオのスイッチを入れた。しかしその日は日曜日であり「未来学講座」はやっていなかった。

月曜日、空に星があるように、浜辺に砂があるように当然のごとく月古十氏と大杉右門氏の声が聞こえてきた。ホワイト氏にとっては、それは妙に懐かしい声だった。聞いてるうちにホワイト氏はまたしても妙なことに気がついた。だが今度はすぐにわかった。土曜日に聞いた事とまったく同じことをやっているのだ。そう、あの処女あじ童貞の未来学をやっているのである。これは、テラ3号が150円であるがごとく確かなことだった。

それからというものホワイト氏は毎日注意深く「未来学講座」を聞いた。しかし金曜日までは何ら異常は認められなかった。そして土曜日、ホワイト氏は何かを期待するかのようにラジオに神経を集中した。するとホワイト氏の期待に答えるかのように「未来学講座」が始った。今度こそ、一たす一が地球ではニであり、アルファ・ケンタウリでは十二であるがごとく間違いなかった。

それから毎日ホワイト氏は何かにとりつかれたようにラジオのスイッチを入れた。その結果、ホワイト氏の所持するところのラジオの、MSFC放送局だけが、土曜日の10時50分から11時迄の10分間、月曜日のその時間の放送をやるということがわかった。それが時空連続体という単一の実在の二つの相である時間の歪によるものであれ、獅子座のウォルフ359番星人レオニアンの地球侵略の前触れであれ、そんなことはホワイト氏

にとってはどうでもいいことだった。ホワイト氏にとって重要なことは、その貴重な時間に、「未来学講座」などというくだらない番組を放送しているということだった。今こそ、ホワイト氏は「未来学講座」が自分にとって何の役にも立たないものであることを理解した。いかに未来学とはいえ、これでは、月曜日の分を土曜日に聞いたところで何のたしにもなりはしない。これが、「今日のニュース」でもあったら予知能力者として、有名なSFマガジンにも紹介されるかもしれないし、まして、これが「競馬ニュース」であったなら……。などと考えるとホワイト氏は少し憂うつになるのです。

今日も今日とてホワイト氏は、「未来学講座」が放送終了になり、その後に「競馬ニュース」が始って、札束をガッポガッポと手に入れる日を夢みながら、月吉十氏と大杉右門氏の今日の講義、「お酒の未来学」をベットの中で聞いているのです。

おわり

司修一論

氏の作品は、良い意味でのエンタテイメントに徹していて、その歯切れの良い文章と、軽快なテンポは多くのファンをつかんでいる。そのSF的センスの良さは、日本のハインラインとも、明治大学の小松左京とも言われている。今号から開始された「土星のプリンセス」は氏のライフ・ワークとも言うべきものであり今後の活躍が期待される。

中川健論

氏の作品の多くは、いったい何が言いたいのかわからないという評判がある。これは、氏がたいへんに独善的な性格であるということから来ている。しかしながら氏が、何かを書きたくて必至になっている態度は認めてやっていいものと思う。最後に、いいかげんに星新一調から脱皮しなければ何も新しいものは生み出せないだろう。今後の活躍が期待される。

〈土星シリーズ〉①

土星のプリンセス

司修一

1.

気がついた時、彼は状況がよくのみこめなかった。たいてい——時に小説の場合は——そんなものだ。とにかく彼がいたのは、せまい車内、——しかもそれは宇宙艇らしい。窓からさしこむ光は、妙にボンヤリしていて無指向性であった。何がどうなっているのか思い出そうとしたが、彼が乗っているのは、地球(テラ)新聞社(タイムズ)のマークがはいっている故障した小型宇宙艇で、場所は土星、——土星!?——その地才都市、ニュー・ワシントンの近く、彼は遭難した記者として、その都市にはいりこむことになっていること、ぐらいしか思い出せなかった。——ちえっ、又予備頭脳がおかしくなりゃあがったナ。

彼——、ジョン＝カッターは退役サイボーグ戦士。二三〇〇年初期に編成された時の第一期生だ。去年一〇〇年の満期を迎え、めでたく除隊したのだ。同期生二〇〇〇人のうち、生き残ったのは七〇〇人あまりで、そのうちほとんどの者が老朽し果て、彼のようにまだ一人前のサイボーグとして通用するのは一〇〇人に満たなかった。彼は退役金で小さな探偵業をはじめた。始めのうちはあまりはやらず、そのうち暇をもてあまし、今ははやるようになっていた。今回もなんらかの事件で来たはずなのだが、彼は忘れてしまった。——驚くにはあたらない。よくあることなのだ。——驚くにはあたらない。彼は重要なことは、忘れないように、備えつけの予備頭脳に記憶させておくのだが、その予備頭脳が、だいぶガタがきていて、時々こうしてちょっとした故障をおこすのだ。——が、これとても驚くにはあたらない。彼自身もよくそれを承知していて、修理道具及び、予備脳に記憶させた重要事項の書類をいつも小型のケースに入れて持ち歩いているのだから。——ところが、驚ろいたことに、彼の時計は、多分着陸のショックで——壊れているではないか?——話がとんでいるって?いやいや読者諸賢よあせるな。彼のケースのキーはその時計なのだ。数字のくみあわせのチャンネル式になっていて、その数字の組み合わせは、時刻なのだ。例えば、八時十五分なら、組み合わせは、〇八—一五だ、分単位になっており、まちがえたりすると、ケースそっくり小

ことばされることになる。ケースの掛け金をはずすと爆弾のスイッチがはいる。それを四つの数字の組み合わせによって、切って行く、という仕掛けなのだ。すなわち、数字をまちがえると、スイッチが切れず、爆発するというわけだ。だから時計がこわれていたということは、とんでもないことなのだ。

カッターは座席にゆっくりと身を沈めた。とにかく、正確な時刻を知らねばならない。何をすることになっているかさえわらずにいるのだから。――とにかく秘密のうちにニュー・ワシントンに入らねばならぬということ、難難者として、誰かにここにおろされたらしいということ、これは依頼された事件のためなのか、俺の自分の問題なのか、――彼は自分の好みで、時々関係のないことに首をつっこむことがあった――。はたまた何かの陰謀なのか――。とにかく時刻を知らねばならない。土星に関する情報をケースの中だ。土星なんて、二〇年ほど前に革命軍の鎮圧にきた時以来忘れてしまっているからな。――俺をこうがタがきては引退を考えねばならんナ。外観だけは、三〇代だが、もう百二十五才だ。生身の部分もそろわずかだし――脳みそ以外に何があったっけ？歯が丈夫だったっけて、――俺自身も疑れた。

とにかく彼は外へ出て、救出されるべく、救難弾を打ち上げた。――まず都市にはいってからだ。くり返すようだが（実際くり返しているが）正確な時刻が必要だ。

彼は救助隊がくるまでの間、身仕度を整えた。外見だけではサイボーグとはわからないから、生身の人間として通すこともできる。わからないが、生身の人間の新聞記者ということにしておいた方が良さそうだ。――彼は宇宙服を着、ケースを確かめ、宇宙船の外へ出た。あのボンヤリとした光は、土星の輪の反射によるものだった。新聞ぐらい読めそうだったが、彼はそんなものもっていなかったので、もう一度こわれた時計をみた。土星時間、二時八分二十六秒で止まっていた。そして、しつこく、正確な時刻を知らねばならない、と思った時、彼方の地平線――土平線はゴロが悪いナ、とチラと思った――に、救助隊のサーチライトが小さくきらめいた。

（以下次号）

〈会員名簿〉

○追加

有馬賢乗（工学部3年）[redacted]

仲野修一（商学部3年）[redacted]

堀江修市（経済学部2年）[redacted]

○住所変更

清川礼子　（下宿）[redacted]

井沢誠一郎　（自宅）[redacted]

小島義一郎　（自宅）[redacted]

○SF NO.2 訂正

藤本佳延　（帰省地）[redacted]

坂井百合子　（帰省地）

野上映一　（帰省地）

庄司修一郎　（帰省地）[redacted]

所浪隆平　（〃）[redacted]

※この項及びSF NO.2の会員名簿に変更・訂正のある人は至急申し出ること。

SF 1969.8 NO.4

昭和44年8月1日発行

編集者　北島利幸

発行者　SF研究会

編集後記

○特にナシ

MSFC

MEIJI UNIVERSITY SCIENCE FICTION CLUB